

【要旨】

古代日本の崇りと災異説く陰陽道を中心に

二〇一八M四三〇〇一 桑山 隼人

古代日本の災異説や崇りに関する研究を通して、とりわけ陰陽道を中心としながら当時の人々の政治的動向や宗教観を検討する。陰陽道に関する先行研究として、細井氏は「陰陽道とは、陰陽師が行う占い・呪術や祭祀・暦や方角の禁忌といった術のことであり、陰陽師たちの組織（集団）も陰陽道と呼ばれる。」と説明している。また、災異説と関連して、細井氏は「災異は政治に対する天の警告だとする儒教的な理念にかわり、神の祟りだとする日本的な観念が強まったことを背景に、陰陽道は九世紀の半ばから一〇世紀には明確に姿を現す。これが陰陽道研究者の共通理解である。」と述べている。古代日本では、神祇官と陰陽寮による占いが確立され、災異や祟りが起こった場合に実践され、宗教的対策として祭祀や祈祷などが行われている。小坂氏は「それ以前神祇官亀卜がもつぱら神崇を卜申したのに対し、これに陰陽寮が加わることで、天皇慎や災異の前兆性が加味され、中国の「災異」思想が、わが国の神祇信仰と融合した災異・怪異思想に発展するという役割を果たしたところに、陰陽道参加の意義が認められる。」と述べている。とはいえ、先行研究は、災異や祟りが頻繁に起こった九世紀まで、神祇官と陰陽寮の占いの明確な役割分担についてまで言及されていない。そこで本研究では、陰陽寮の立場から「何を占いの対象としてきたか」ということを主眼とし、その変遷について検討した。併せて、陰陽寮と神祇官の比較を通して、それぞれの占いが果たしてきた役割についても検討した。

研究を通して、古代日本における陰陽寮と災異に注目し、特に日本の崇りが中国伝来の災異説や天人相関説といかに融合し、変容を遂げたかを考察した。まず『日本書紀』等の記事から、古代日本における祟りは、神の祭祀の要求であることを確認した。六世紀以降、仏教が日本に伝来すると、仏教は神の祟りに対抗する手段としての役割を担うようになった。また、他にも複数の占い方法が中国から伝来し、古代日本に受け入れられた。さらに八世紀以降、天人相関説に基づく天譴説は律令制形成の一翼として導入された。その後、災異の原因を天皇の不徳に帰しつつ、神仏への祈願も盛んにおこなわれるようになった。八世紀には、祟りを引き起こす主体として、亡くなった人物の霊や山陵が加わり、それらを畏怖し神格化する御霊信仰へと展開した。祟りの主体が多様化、複雑化すると、それまで神祇官が担っていた占いに加え、九世紀以降に台頭するのが陰陽寮の占いである。陰陽師は神祇官と並んで「怪異」の原因を判定している記事がみられる。しかし、陰陽寮の役割はそれだけに留まらず、専ら今後の対処法を進言する未来志向の職務を担ったのである。ここに陰陽寮と神祇官による占いの明確な相違点が浮き彫りになった。